

ギリシャから現代へ

—— John Addington Symonds と同性愛 ——

金 田 仁 秀

From Greece to Modern Times:

John Addington Symonds and Homosexuality

Masahide KANEDA

群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編

第70巻 113—128頁 2021 別刷

ギリシャから現代へ

—— John Addington Symonds と同性愛 ——

金田 仁秀

群馬大学共同教育学部英語教育講座

(2020年9月30日受理)

From Greece to Modern Times: John Addington Symonds and Homosexuality

Masahide KANEDA

Department of English, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 30th, 2020)

Gregory Woods は、ゲイ文学誕生の記念碑を建てようとするならば、Walter Pater や Benjamin Jowett の下に若者が集り、ギリシャやローマの古典を読んだ場所である“one of Oxford’s relatively unloved Victorian buildings” (3) であろうと述べている。そして1840年代にJowettによってプラトンが講義に導入されたことをイギリスの同性愛文化の歴史におけるもっとも重要な出来事と指摘している。プラトンが語るソクラテスと美しい少年たちとの愛情は、当時のオックスフォードの個人指導システムと自然に融合し、Jowettの道徳的立場とは裏腹に、擁護されるだけでなく昇華される道を開いた。こうした男性間の欲望は単なる文学上の議論ではなく現実的なものであったとしながら、Linda Dowling は次のように論じている。

... the philosophic or intellectual transcendentalism that the Oxford reformers had located in Plato ... could be extended, as Pater and Symonds both immediately saw, to the ideal education of the Platonic or Socratic doctrine of eros. This model of love ... could be recaptured within the existing structures of Oxford homosociality: the intense friendship, the tutorial, the essay society. (81)

Pater, John Addington Symonds, Uranian poets、そしてOscar Wildeなどによるある種の同性愛文化を後押しした要素の一つは、このように大学におけるギリシャ古典カリキュラムとその指導形態であった。こうした影響により19世紀後半のイギリスは、文学上では微妙な形でありながら男性同性間の愛情が多く描写された。それは*The Artist* や *The Spirit Lamp* といった雑誌に掲載された詩や物語からも分かる。しかしながら、他方で1885年のいわゆるLabouchère Amendmentに見られるように、社会の浄化思想を土台にしたソドミーの取締りは緩和されるどころか、強化された時代でもあった。また大陸に目を向けるならば、19世紀後半はKarl Heinrich Ulrichsを皮切りにした同性愛解放運動が芽生えると同時に、性科学による性的倒錯の定義が誕生し、ソドミーとは異なる認識が現れ出した時期でもあった。それにも拘らず、H. G. Cocksが明らかにするように、同性愛は公然の秘密とされ、言及すること自体が忌避されたイギリス社会においては、こうした大陸の議論は黙殺された。1895年に始まるWilde裁判でも、問題となったのは古くからのソドミーとしての逸脱的な行為であった。Wildeも同性愛は罰せられるべき罪ではなく治療される病気として大陸では考えられてい

ると述べているが、それは投獄後のことであった。¹この点で、イギリスにおける同性愛の言説形成に影響を与えたのは、大学におけるギリシャの愛、特にプラトンの少年愛への認識であり、明らかに大陸における議論ではなかった。

こうした中、大陸の性科学にも精通し、それをギリシャと結びつけて論じた人物として Symonds の名前を挙げることができる。彼は Jowett に師事し、ギリシャの古典やルネサンスの研究に携わりながら多くの筆を執った。それと同時に、本論において取り上げる *A Problem in Modern Ethics* (以下 *Modern Ethics* と省略) も書き上げた。これは大陸での性科学の議論を紹介しつつ反論しながら、法改正の必要性を説くものである。私家版として出版されただけであったため、イギリスの同性愛の概念に大きな影響を与えることはなかったものの、性科学の観点からすると、これは Havelock Ellis との共著 *Sexual Inversion* に先じるイギリス最初の書き物であった。彼はまた Timothy d'Arch Smith が指摘するように、Uranian たちに友人として多くの影響を与えた。その点で彼は 19 世紀後半のイギリス同性愛文学、文化の発展に欠かすことのできない存在であった。

しかしながら、Symonds はイギリスの表舞台で燦然と輝き活躍したわけではない。*Times* は死亡記事においてイタリアのルネサンス研究や翻訳などの功績を高く評価しているものの、彼は心身の不調もあってスイスで養生しながら、体面を重んじた静かな生活を送った。友人たちには同性愛的指向を知られていたにしても、彼は世間的には 3 人の娘を持つ理想的な家庭の良き夫であったし、同性愛についての重要な論考である *A Problem in Greek Ethics* (以下 *Greek Ethics* と省略) も *Modern Ethics* も世間に公表しなかった。また、死後には *Sexual Inversion* から彼の名前は削除され、Horatio Brown による伝記でも同性愛への言及は避けられた。彼の *Memoirs* も長きに渡って出版されることはなく、それが明らかになったのは 1984 年のことであった。しかも Sarah J. Heidt が論じるように、その時でさえ 3 分の 1 が削除されたものであった。確かに、David Amigoni と Amber K. Regis が指摘するように、*Memoirs* の出版によつ

て彼には新たな光が当てられるようになった。当時の同性愛文学、文化についての研究でも、彼の名前は少なからず触れられる。また 2000 年には初めての本格的な論文集と言える *John Addington Symonds: Culture and the Demon Desire* も編まれ、同性愛の観点に限らない議論もなされ出した。そして 2016 年には *Memoirs* の完全版も出版されている。それでも Symonds は、Wilde や Pater と比して本格的に取り上げられることは未だ少ない人物と言わざるを得ないだろう。

彼の書き物は詩、論考、随筆、批評など多岐に渡っており、題材も多様である。また、それぞれの視点や焦点も決して一様ではない。そこで本論においては、同性愛を主題とした論考である *Greek Ethics* と *Modern Ethics* を中心に据えながら、ギリシャ解釈や歴史への視座と性科学を彼がいかに結びつけ、同性愛に対する概念を提示しているのかを考察したい。そして彼の同性愛議論の特異性と重要性を明らかにしたい。

*

Symonds の同性愛に関する書き物としては、*Greek Ethics* (1883)、*Modern Ethics* (1891)、*Memoirs* (1984) が重要であるが、それぞれが書かれた時期や論点が異なることを念頭におく必要がある。例えば *Memoirs* は 1889 年から書き始められているが、彼自身が述べるように性科学を知る前に書かれた部分が多く含まれているし、*Greek Ethics* と *Modern Ethics* ではかなりの年月の開きがあり、焦点も異なる。また Phyllis Grosskurth による伝記や *Memoirs* は、幾つかの重要な経験を通して、彼の同性愛に対する見解が変化したことを物語っている。したがって、これらの差異を踏まえながら、それぞれを読み解く必要がある。

この 3 つの著作で最も早く書かれたのは *Greek Ethics* であるが、これと同時期に Symonds は *Studies of the Geek Poets* (1873, 1876; 以下 *Greek Poets* と省略) を書いているので、まずはそれを見たい。というのも、ここでは *Greek Ethics* で論じられるドーリア人への言及がなされているだけでなく、“The Genius of Greek Art” と題された章では、彼の同性愛

議論にとって重要な要素となる、ギリシャにおける自然との調和の概念と19世紀後半の社会との関係性を見ることができるからだ。

Gideon Nisbetによると当時のベストセラーとなった *Greek Poets* は、1873年に第一シリーズが、1876年に第二シリーズが出版されている。Symondsがその目的を、一般の読者にギリシャ文学を理解させることと、ギリシャ詩人に対して19世紀の文学批評の方法を適応することであると述べるように、全体としては多くのギリシャ詩人をジャンルごとに分けながら、それぞれの内容や背景を歴史的に論じるものである。そしてここではギリシャ的愛についての言及が見受けられる。その一つがテオクリトスによる“Doric chivalry” (328)を主題とした幾つかの詩を取り上げる際のものである。Symondsは、男性間の情熱を論じる上で重要な礎となる戦争における騎士同士の関係性を論じながら、それは単なる“the lover”ではなく、“the guardian also and tutor” (329)としての男性間の情熱、年長者が若者を導く男性的な愛であるとし、次のように述べる。²

This order, protected by religious tradition and public favour, regulated by strict rules, and kept within the limits of honour, produced the Cretan lovers, the Lacedaemonian “hearers” and “inspirers,” the Theban immortals who lay with faces turned so stanchly to their foes that vice seemed incompatible with so much valour... The same longing retrospect is cast upon the old days “when men indeed were golden, when the love of comrades was mutual,” and constancy is rewarded with the same promise of glorious immortality as that which Plato holds out in the *Phaedrus*... Without taking some notice of this peculiar institution, in its origin military and austere, it is impossible to understand the chivalrous age of Greece among the Dorian tribes. (329-30)

ここにはSymondsがギリシャ的愛を論じる際の特徴が凝縮されている。それは、プラトンによる哲学的、教育的な側面を見出すこと、とりわけ軍隊における絆として男らしさを強調すること、“chivalrous”

という言葉に象徴されるように、理想化された純真性としてこの愛を記述すること、そして制度化されたものとして、19世紀の視点からは理解が容易ではないと指摘することである。彼はギリシャにおける男性間の愛を客観的な歴史として記述しながら、自らの解釈を添えるのである。

Greek Poets の第二シリーズ出版時には、初出の部分にも加筆や修正がなされているが、本論との関係では明確に少年愛に触れている箇所に加筆を取り上げておきたい。それはアリストファネスについての章において、女性の風刺的な描写を論じる際に現れる。Symondsは、他のギリシャの風刺詩人と同じであるとしながら、女性が“a station of respect and honour” (286)を持っていたならば許されなかったであろうと指摘し、次のような注釈を添えている。

One of the most interesting chapters in Greek history still remains to be written. It should deal in detail with the legal and domestic position of free women at Athens, with the relation of their sons and husband to Hetairai, and with the whole associated subject of paiderastia... The great difficulty which must have been felt by all thoughtful students of Greek literature, is how to reconcile the high ideals of female character ... with the contemptuous silence of Thucydides, with the verdict of Plato upon women-lovers as compared with boy-lovers... (286)

ここでは“paiderastia”や“boy-lovers”という表現が何気ない形で用いられている。注釈としてこれ以上の考察はなされないものの、これを周知の事実として記述し、最も興味深いものと示唆している点、そして何よりも女性の地位という社会的状況との関係でこれらに言及していることは重要である。これは *Greek Ethics* で強調されるように、彼が少年愛を社会制度として捉える態度を明確に示している。

The Renaissance in Italy の記述などからも明らかのように、Symondsは対象が文学であれ社会であれ、歴史的な観点から客観的に記述することを旨としている。そのため、倫理的な側面や価値についての議論は行わない傾向にあるのだが、*Greek Poets* の最終

章に置かれた“The Genius of Greek Art”は異なっている。ここで Symonds は、ギリシャ時代と 19 世紀との差異を語りながら、明らかに前者に肩入れしていく。ギリシャ時代が優れているのは、端的に言って精神と身体が融合し、自然と調和しているからである。ギリシャでは美が絶対的な領域として、どの人種が考える以上にギリシャ精神を貫いていた。倫理に関しても、ギリシャ人たちのそれが美的なものであるからと言って、倫理的ではないと考えることは間違いである。Symonds は、キリスト教導入前のギリシャを、感覚的、身体的な衝動も克己によって制御された、罪も下劣さも存在しない理想郷として描き出す。

The sensual impulses, like the intellectual and the moral, were then held void of crime and harmless. Health and good taste controlled the physical appetites of man, just as the appetites of animals are regulated by unerring instinct. In the same way a standard of moderation determined moral virtue and intellectual excellence. But beyond this merely protective check upon the passions, a noble sense of the beautiful, as that which is balanced and restrained within limits, prevented the Greeks of the best period from diverging into Asiatic extravagance of pleasure. Licence was reckoned barbarous, and the barbarians were slaves by nature...: Hellenes, born to be free men, took pride in temperance. (419)

こうした調和はローマ人によって壊され、美的感覚も“lust”によって乱され、さらにキリスト教の原罪の教えが決定的となり、人間と自然の統一、精神と肉体の一致は失われてしまったと Symonds は続ける。ここでは、男性間の情熱を含んだ性的な関係については一切触れられていないものの、節制による感情の制御とその健全性の概念は、彼の同性愛の議論でも大きな役割を果たすものとなる。こうしたギリシャ観は、*Greek Ethics* や *Modern Ethics* の根幹をなすのだ。最終的に Symonds は、ギリシャ時代と 19 世紀との違いは内的なものではなく外的なものであり、これを現実的にする方法は “to be natural”

(437) であることだとする。初出時では注釈に位置づけられた一節を、改訂版では加筆をして本文中に位置づけ、次のように述べる。

We must imitate the Greeks, not by trying to reproduce their bygone modes of life and feeling, but by approximating to their free and fearless attitude of mind. While frankly recognising that much of their liberty would for us be licence, and that the moral progress of the race depends on holding with a firm grasp what the Greeks had hardly apprehended, we ought still to emulate their spirit by cheerfully accepting the world as we find it, acknowledging the value of each human impulse, and aiming after virtues that depend on self-regulation rather than on total abstinence and mortification. (437)

“While”から始まる文は改訂版で加筆されたものなのだが、キリスト教的な禁欲ではなく、節制の必要性が唱えられていることが特徴的である。先の一節同様、彼にとっては自然な状態とは逸脱を制御できる状態であって、過度な欲望を意味しない。放縦と映ることを認めつつ、彼は精神と肉体の調和によって支えられた理想郷の中心に克己の精神を据える。それによって、逸脱的、反自然的、過度の肉欲的なものとは異なる健全な同性愛への道が開けるのだ。ここでの理想的なギリシャと同性愛の結びつきは、初出時の注釈にあるものの、改訂版では削除されている部分からも分かる。Symonds はこの数行後で “Walt Whitman is more truly Greek than any other man of modern times.” (422) と述べるのだ。19 世紀後半のイギリスの多くの同性愛者にとって Whitman の詩、特に “Calamus” は男性間の絆、情熱を讃えるものとして重要な役割を果たした。それは Symonds にとっても同様であった。彼はこのように、節制、自然、調和、Whitman といった語をギリシャ社会に付与する。そうすることで、その愛も含めたあらゆるギリシャ精神の健全性を主張するのだ。

では、こうした要素を含む *Greek Poets* の受容に目を向けることで、ギリシャ精神と同性愛に対する周囲の認識を見てみたい。1873 年の出版時からおおむ

ね評判は良く、例えば *The Examiner* は一般の読者だけではなく古典教育を受けた人々にも役立つとし、幾つかの内容上の問題点を指摘しながらも、この本を“so eminent for insight, enthusiasm, and graceful expression” (1050) と称賛している。³ここでは Symonds のギリシャ精神への傾倒は彼の熱意として好意的に考えられており、同性愛は言うまでもなく、倫理的な問題への言及はまったくない。同様に *The British Quarterly Review* では、“originality of treatment and close and sympathetic knowledge of Greek poets” (593-94) が窺えるとされ、最終章については否定的な見解が述べられるものの、ギリシャ称賛への非難は見られず、男性間の情熱についても触れられていない。*The Academy* では、異なる時期や人種の違いを十分に考慮せずにギリシャ芸術が理想的な統一として語られているという欠点が指摘されたり、議論の正確性については疑問が付されるものの、Whitman への注釈の言及も“a really luminous paradox” (262) と述べられるだけである。*The Illustrated Review* では、Symonds 自身による“A Spartan or a Cretan settlement resembled a large public school, in which the elder boys choose their fags.” (200) という際どい一節が引かれながらも、この正当性以上は語られない。これらの書評は、必ずしも当時の読者の目には Symonds の議論に垣間見られる同性愛的テキストが、明白でも確かでもなかったことを示している。

しかしながら、ギリシャ精神が同性愛と結びつき、倫理的にいかがわしいものと捉えられる可能性がなかったわけではない。例えば、第二シリーズ出版後に出された *The Saturday Review* による書評は、Symonds がギリシャの友情を騎士道になぞらえることに異を呈し、“the ‘devoted friendship’ of the Greek man for the Greek youth was something very different, and revolts our moral sense.” (238) と指摘する。この“devoted friendship” がソドミー的な肉欲への非難であることは、ギリシャの倫理基準の悪化に Symonds が目を閉じていると続けて論じることからも示唆される。ここでの非難は、ギリシャの愛—とりわけプラトンによって擁護されるような少年愛—を、ギリシャの倫理的劣等性と結びつけ、両者を断罪するというもの

である。

1877年3月に“The Greek Sprit in Modern Literature”と題されて *The Contemporary Review* に掲載された Richard John Tyrwhitt の非難も、これと同様の視点から Symonds のギリシャ崇拜が非難される。彼は Matthew Arnold によるレニズムとヘブライズムに言及しながら、キリスト教徒の側から明白な反対を行う必要性を述べ、倫理の観点から考えることの重要性を説く。Tyrwhitt は、“polemical Agnosticism”に向かう *Greek Poets* は“the result of vacation tours about the Mediterranean and of the usual sort of visits to Italian galleries” (556) のもので、知識に根差したものではないと指摘する。そして Symonds による自然の議論を取り上げ、“Mr. Symonds is probably the most innocent of men.” (557) と冷笑的に述べながら、次のように論じる。

The emotions of Socrates at sight of the beauty of the beauty of young Charmides are described for him by Plato, in the dialogue which bears the name of the latter. . . . The expressions put in his mouth are, no doubt, typically Hellenic. But they are not natural: and it is well known that Greek love of nature and beauty went frequently against nature. (557)

生殖に基づいた自然な愛からの逸脱として、ソドミーは古くから反自然と形容されてきたが、ここでの Tyrwhitt の議論はその常套句を用いてギリシャの愛とその倫理とを糾弾するものである。この批評は、*The Saturday Review* の書評と共に、ギリシャ精神の称賛は、倫理的観点から同性愛と結びつけられる非常に危うい位置にあったことを示していよう。

Greek Poets に対するこうした二つの反応から明らかであるのは、ギリシャへの言及と名付け得ぬ愛との関係は、当時、論者の視点や知識、議論の焦点によって異なっていたという事実である。Richard Delamora は、Tyrwhitt の議論における Whitman は“a code word for illicit desire” (87) であったと述べているが、すべての人に Whitman が同性愛的に読まれたわけでもない。今日の視点からすると、ギリシャ精神、プラトン、Whitman となると男性間の情熱と容

易に結びつくが、そのような明確な連想はまだなく、認識されるとしても婉曲的にしか語られなかったのだ。

こうした曖昧性は、同性愛を擁護する側にとってもうまく機能した。Symonds は第二シリーズ出版時に“The Genius of Greek Art”への批判に応じる最終章を加えているが、そこでは倫理観を通しての間接的な同性愛擁護を垣間見ることができる。彼はここで再び“nature”に従うことの重要性を説く。彼によると 19 世紀の倫理の基礎は神学であるのに対して、ギリシャの倫理は科学的なものであり、それは“the order of the universe” (386) への信念に基づいている。ギリシャ時代では人は世界と調和しており、外的な神による禁欲がない。“his highest duty consists in conforming himself to laws he may gradually but surely ascertain” (387) と考えるのが、ギリシャの倫理観であり、それ自体が自然であるのだ。Symonds はここで男性間の情熱に言及してはいない。しかしながら、こうした論理は、反自然のソドミーに対して、自然と調和した内的な欲望としての同性愛の概念へと繋がる。“health in the body” と “temperance in the soul” (378) に対応した調和という語が示唆するように、このような議論によって、逸脱的で、感覚的な欲望とは異なる情熱の措定が可能となるのである。ギリシャ社会について芸術と同時に倫理を讃えることは、Symonds にとっては高貴な同性愛唱道への糸口となるのだ。

ギリシャ文学や歴史に精通し、*Memoirs* から分かるように生涯に渡って自らの同性愛的指向をどのように処理するのか考え続けた Symonds が、*Greek Poets* と時を同じくして同性愛に焦点を当てた *Greek Ethics* を書いたのは、至極、当然の成り行きだったと言えるかもしれない。Symonds 自身のメモによると 1873 年に書かれたこの本は、1883 年に 10 部だけ私家版として出版され、死後、加筆、修正されたものが Havelock Ellis との共著 *Sexual Inversion* (1897) に付録として納められた。そのため執筆時には *Greek Poets* とは異なり、より擁護的にこの題材を扱うことが可能であったと考えられるが、歴史家としての側面を持つ Symonds らしく、全体としては客観的な記

述のスタイルをとっている。とはいうものの、彼がこの歴史的論考が、単に過去の事象の掘り起こしではなく、19 世紀の同性愛の問題に光を与えるのに不可欠のものと考えていたことは疑いが無い。彼は Ellis と *Sexual Inversion* を計画していた際、“no survey of sexual inversion is worth anything without an impartial consideration of its place in Greek Life” (*Letters III*, 710) と述べている。また Edward Carpenter に宛てた手紙では、次のように断言する。

All the foreign investigators from Moreau & Casper to Moll, are totally ignorant of Greek Customs. Yet it is here that the phenomenon has to be studied from a different point of view from that of psycho-pathology. Here we are forced to recognize that one of the foremost races in civilization not only tolerated passionate comradeship, but also utilized it for high social and military purpose. (*Letters III*, 798)

この一節で注目すべきは、習慣という言葉が示唆するように、Symonds が制度としてこの愛を捉えようとしている点と、高い社会的、軍事的な目的に利用できた、そしてできると見なしている点である。Symonds は、大陸で議論され出していた本質主義的に病理化するモデルとは異なる、健全性に裏打ちされた、社会に役立つ情熱をギリシャの制度に見出そうとするのだ。彼には法的扱いを変える目論見があった。したがって、10 部の私家版であったとはいえ彼の議論は世間に向けられたものであったと言える。

では、幾つかの主張や言葉を取り上げながら、Symonds のギリシャ的愛の扱いの特徴を見てみたい。⁴ まず彼はホメロスから議論を始めるが、アキレスとパトロクロスの間に描かれる友情は英雄的なものであり、それを少年愛としたのは後の解釈であると論じる。これは男性間の愛の発展を歴史的に特異なものであるとし、決して一般化しようとはしない態度を明確に示している。しかしながらこのことは、Symonds が英雄的なものを同性愛として見なさないということではない。むしろ、英雄的な関係は“effeminacy”を持たない“a powerful and masculine

emotion” (45) として、彼の論には重要な要素となっている。Greek Poets において、愛情で結ばれた強い絆を持つドーリア人の軍隊について述べられているが、Greek Ethics でもそれが繰り返され、Symonds は軍隊の中に制度としての少年愛を見出す。年長者は “a pattern of manliness, courage, and prudence” (56) であり、二人の関係に感覚的なものはない。愛するもの、愛されるもの双方が名誉に彩られ、女性との結婚よりも強い絆が生み出される。やがて下等な愛の形式が起こると説明されるが、ドーリア人の男性的、軍事的な愛との対比として、“the effeminacies, brutalities and gross sensualities” (62) が挙げられることは注目に値する。Symonds は徹頭徹尾、同性愛の男らしさに固執する。これは個人的な好みの問題というよりは、彼のジェンダーに対する確固とした概念に基づいている。殊更、男性的であることを強調し、節制によって感覚性や身体性を排除する態度は、Symonds が 19 世紀後半の中流的な男性性の規範を中心に同性愛概念を形成していることを示している。彼にとってそうした規範から逸脱した同性愛は、健全な情熱の埒外にある。だからこそ、彼は感覚的な関係を悪徳と断言し、プラトンの制限を肯定的に論じるのだ。

プラトンの議論では Symposium からの引用に始まり、アテネにおける倫理観の高さが強調される。そして、その特徴として、高貴な少年愛と下劣な少年愛とを区別していること、女性に対してよりも男性に対しての愛を好むこと、少年愛的友情は永続の可能性があること、家での少年に対する監視の規則を挙げる。とりわけ少年の状況が詳細に記述されるが、Symonds によると、運動場が重要な役割を果たしたとされ、プラトンの言葉をはじめとして数々の引用がなされる。その際、運動場でも下劣な少年愛があったと彼は認めるが、名誉あるものとそうでないものという区分は、彼が常に言及するものである。それは愛される少年の態度にも及び、愛情を持つゆえに受け入れるものと野心や金銭のために身を売るものとの区別に対応する。当然のことながら、Symonds はこうした区分を説明しながら、名誉あるものだけを是認するのであるが、注目すべきはそこで説明さ

れる属性である。彼は、少年愛と結びつけられる肯定的な要素として、“liberty, manly sports, severe studies, enthusiasm, self-sacrifice, self-control, and deeds of daring” (86-87) を挙げ、女性的な若者のみだらな不品行を非難すべきものとする。Symonds は、ここにおいても男らしさと節制という当時の男性性の規範をギリシャの少年愛の美德に流用させるのだ。これは、少年愛が “grossness, effeminacy, and aesthetic prettiness” (103) に陥った時にギリシャの愛は終わりを迎えたという説明でも窺える。

同性愛の感情自体には共通性を認めながらも、習慣という言葉をししばしば使うように、Symonds はギリシャの愛を制度の観点から捉えている。そして少年愛の男性的な特徴に注目し、女性との関係性や女性の地位を男性間の情熱の発展の大きな要因と見なす。男女の關係に “passionate enthusiasm” (107) が現れる余地はなく、相互の愛からなる精神的な愛情は男性間にしか生じ得なかった。あらゆることが男性同士でなされ、感情も男性の領域に限られていた。したがって結婚は国への義務でしかなく、形式的なものでしかなかったのだ。Symonds は、女性に適切な地位を与えなかったことを欠点と断言しながらも、少年愛はそうした独特の文化による当然の帰結であると論じる。このような見方は、女性がない集団での同性愛の発展という理論に繋がるという点で、パブリックスクールに代表される環境による悪徳としての同性愛を想起する危険を孕んでいる。しかしながら Symonds は、節制や規律の概念を繰り返すことで、感覚的な欲望から距離を置くことを忘れない。宗教的に妨げられないどころか、推奨される社会状況であるならば、こうした習慣は広がっていく。Symonds からすれば、節度を保つ限りそれは下劣なものにはならないのだ。⁵

Greek Poets では芸術と倫理全般の関係が述べられているが、Greek Ethics では、Symonds は少年愛と芸術の関係、とりわけ彫刻の美における健全性や倫理的な正しさから少年愛を擁護していく。男性の知的、倫理的性質を帯びた男性美は、“prurient effeminacy” (109) によって汚されることも、“feminine voluptuousness” (109) が混じることもない。女性に対する

欲望は不品行に近づくのとは異なり、男性への情熱は純粋なものであり、エロスでさえもギリシャでは節度を持った若者であると指摘される。Symondsはこのように、男性性に重きを置き“effeminacy”を下劣さと結びつける。身体的な完璧さは倫理的な卓越性に繋がる。ギリシャ人によって理想化されている倫理とは“[h]ardiness, self-discipline, alertness of intelligence, health, temperance, indomitable spirit, energy, the joy of active life, plain living and high thinking” (113)であり、これらは女性ではなく若者の身体に見受けられる。ギリシャの倫理は美的なものであると言いながら、Symondsはそれを少年愛と結びつけて昇華する。それは自然な欲望であり、すべての調和の中にある。

Their personal code of conduct ended in “modest self-restraint”: not abstention, but selection and subordination ruled their practice. They were satisfied with controlling much that more ascetic natures unconditionally suppress. Consequently, to the Greeks there was nothing at first sight criminal in pederastia. To forbid it as a hateful and unclean thing did not occur to them. Finding it within their hearts, they chose to regulate it, rather than to root it out. (113)

ここでの“criminal”や“a hateful and unclean thing”という言葉は、19世紀の同性愛の扱いに対する批判を示唆している。自然に沸き起こる男性間の情熱に対しての適切な対応は、社会による抑圧ではない。禁欲ではなく、節度を持って個人が処理すれば十分なのだ。少年愛をこのように歴史的な制度として捉えるSymondsの理論は、Carpenterをはじめとする同時代の同性愛擁護の議論で見られる同性愛の普遍化とは異なり、解放の原理とは結びつかないように思える。しかしながら、精神と肉体、そしてそれに基づく倫理に健全性を見出し、自然の中に節制を含ませることによって、彼はその特異性こそ目標とすべきものと論理づける。*Greek Poets*で模倣することが奨励されていた通り、ギリシャ芸術や精神を奨励することが、そのまま同性愛の肯定となるのだ。

歴史性に注目する*Greek Ethics*では、同性愛の普

遍性ではなく、制度ゆえの発展が主張の基盤となっている。したがって、それ自体で欲望が正当化されるとSymondsは考えていない。同性愛的情熱は、その扱い方によって高貴なものにも下劣なものにもなり得るのだ。このように性的な欲望を捉える見方は、非常に急進的な側面を持っている。彼はギリシャでは、家庭は熱烈な情熱の場とは見なされなかったと述べる。プラトンでも指摘されることではあるとはいえ、Symondsは出産と繋がる生殖をも便宜的なものとして主張するのだ。これは異性愛も決して自然な感情ではないという概念に繋がる。実際、外面的には理想の家庭を築いていたものの、Symonds自身の結婚が便宜的なものであった。異性愛を不自然だとは述べないまでも、Symondsは、欲望を構築主義的に捉えている。*Modern Ethics*では、同性愛の自然性や健全性が議論の中心となる。そのため、彼は欲望を極限まで歴史化する視座を押し進めることはなかったが、*Greek Ethics*における態度は、そうした可能性を秘めていたと言えよう。

*Greek Poets*や*Greek Ethics*で描かれるギリシャ的愛は、19世紀後半の社会からは理解が難しいながらも歴史的な事実であり、その精神に近づくことは可能であるとSymondsは考えていた。一方で、当時の男性性の規範を重視し、同性愛への罪の意識を内面化していた彼は、理想と現実の乖離をどのように処理すべきか模索していた。このことは、彼の詩、評論、手紙、自伝など、あらゆる書き物に垣間見られる。中でもそれが最も明白に表れているのは、師であるJowettに宛てた手紙である。彼はJowettがギリシャの愛を現実とは無関係と考える態度に苛立ちを覚えながら、次のように述べている。

It surprises me to find you, with your knowledge of Greek history, speaking of this in Plato as “mainly a figure of speech” — It surprises me as much as I seem to surprise you when I repeat that the study of Plato is injurious to a certain number of predisposed young men.— Many forms of passion between males are matters of fact in English schools, colleges, cities, rural districts. Such passion is innate in some persons no less than the

ordinary sexual appetite is innate in the majority. With the nobler of such predetermined temperaments the passion seeks a spiritual or ideal transfiguration. When, therefore, individuals of the indicated species come into contact with the reveries of Plato ... the effect upon them has the force of a revelation.... For such students of Plato there is no question of “figure of speech,” but of concrete facts (*Letters III*, 345-46)

Symonds にとってはプラトンを通したギリシャの愛の認識は、自らの欲望についての啓示であり、その肯定に必須のものであった。それは実際の生活と直接的な関係を持つ現実的な事柄であった。しかしながら同時にそれは、理想と現実の対立を浮き彫りにするものであった。Symonds がここで、生まれつきの同性愛の傾向を持つ者にとってはギリシャへの知識が害になると述べている点はそれを表している。彼は欲望自体を問題視しているのではない。この一節が意味するのは、現実社会においては罪や犯罪として否定される自然な欲望がギリシャへの知識を通して肯定されると、歴史的制度間での大きな隔たりを認識させ、そのジレンマを生じさせるということだ。とりわけ当時の男性性規範からの逸脱を否定する Symonds にとっては、身体や感覚という否定的要素が常に先行するため、欲望の啓示はより一層の困難を引き起こす。*Greek Poets* や *Greek Ethics* で語られるように、いかに精神性が強調されていようとも、ギリシャ的愛の身体性は完全に払拭されているわけではない。それは、節制によって適切に制御される限り許容される。したがってプラトニックな解釈は、身体的接触を軸に規定されるソドミーと完全に袂を分かたつわけではない。このような問題を解消するには、ギリシャ的愛の理念を維持しながら、身体に関する現実的な規範を的確に理論化する方法が求められる。*Modern Ethics* においてそうした理論化の軸となるのは、同性愛は生まれつきという概念である。それによって Symonds はソドミーとの差異化を試み、ギリシャの自然的調和と性科学の概念を巧妙に結びつけるのだ。

現代に焦点を移した *Modern Ethics* は、副題に

“addressed especially to medical psychologists and jurists” とあるように、*Greek Ethics* よりも法改正を意識したものであった。しかしながら Symonds は批判を覚悟でそれを世間に公表するほど大胆ではなく、*Greek Ethics* より多いものの、わずか 50 部の私家版としてしか出版しなかった。これが出版されれば“a great sensation” (*Letters III*, 419) を引き起こすことを確信していたが、世間に出すには時期尚早と考えていたのだ。ここには、自分だけではなく家族の体面を常に気かけ、同性愛について公けに議論することに対して慎重であった彼の姿がはっきりと浮かび上がる。確かに、後に *Sexual Inversion* でさえも発禁処分にあったイギリスの歴史を考えるならば、彼が公表を控えたのは賢明だったのかもしれない。Ellis との計画中のやり取りでは、自分は“the psychology of this matter” (*Letters III*, 755) を扱う能力はないとし、ギリシャの愛を歴史的に扱うことにしているが、これは飽くまで Ellis との共著計画での自らの位置づけに過ぎない。実際、友人や知人に回覧した際、*Modern Ethics* に対する好意的な意見に勇気づけられ、1891 年に Henry Graham Dakyns に宛てた手紙では、加筆修正し *Greek Ethics* と共に出版する意図を述べている。⁶ 結局、*Sexual Inversion* での *Greek Ethics* の出版さえも目にする事なく早世してしまったが、*Modern Ethics* は、大陸での性科学の議論と制度としてのギリシャの愛を結びつける試みとして、彼の特異な同性愛理論を照らし出す。

Symonds は *Modern Ethics* においても、ギリシャでは男性間の情熱を “the level of chivalrous enthusiasm” (127) に高めることに成功したと、ギリシャの歴史への言及から始めている。⁷ しかしながら、ギリシャに限定せず、この情熱はあらゆる時代、あらゆる場所にあると指摘する。この点で *Greek Ethics* が歴史的な特異性を中心に議論がなされていたのとは異なり、*Modern Ethics* ではその普遍性が重要な要素となることが示唆されている。彼は “a passion which is inherent in human nature” (131) といった *Greek Ethics* では見られなかった言い回しも使いながら、それがいかに自然な情熱であるのかを強調する。それを罪とし社会に反感を植え付けたのは、キリスト

教的な思想に過ぎないとその歴史性を意識しつつも、ここではそれ以上に生来の気質としての同性愛が軸となるのだ。この点で、*Modern Ethics* における彼の態度は、構築主義的なものから本質主義的なものへと移行している。

普遍性や自然性に触れた後、Symonds は同性愛に対する 19 世紀の概念の誤謬について論じる中で、通常の快楽に飽きた単なる放蕩のために同性愛者になったというのは間違いであると述べる。但し、そういう人もいることを認めている点は重要である。というのも、*Modern Ethics* に見られる Symonds の議論の特徴の一つは、生まれつきとそうでないものを区別することにあるからだ。多くの場合ではそうした本能は生まれつきであり、変えることはできないとしながらも、彼は逸脱的な欲望としての同性愛を排除すべきものとみなす。ソドミーと不自然さを結びつける社会の概念を利用することで、そうではない自然な情熱を提唱するのだ。事實は、社会の法や敵意によって、感情の自由で健全な発露が阻まれるがために、病的にならざるを得ない。悪いのは欲望ではなくそれを抑える社会なのだ。このように論理づけることで、Symonds は自然な欲望を健全なものとし、不自然な後天的な欲望と差異化する。

こうした自然と健全さは、男性的な規範と軌を一にすると彼は認識する。*Greek Poets* や *Greek Ethics* において同性愛を“effeminacy”と結びつけることに繰り返し反論していたが、それは *Modern Ethics* でも変わらない。そういう人もいると認めつつ、彼は同性愛と男らしさの強い関係性を強調する。

But it is a gross mistake to suppose that all the tribe betray these [female] attributes. The majority differ in no detail of their outward appearance, their physique, or their dress, from normal men. They are athletic, masculine in habit, frank in manner, passing through society year after year without arousing a suspicion of their inner temperament. (135)

彼がここで特徴づける外面から仕草までを貫くのは、明らかに当時の男性性規範である。これこそが、彼にとっては同性愛者の健全性と自然性を映し出す証

となるのだ。

同性愛者は生まれつきで健全であるという前提を元に、Symonds は“descriptive”から“idealistic”まで、さまざまな議論を取り上げながら批判、検討していく。例えば“medico-forensic”の部分では、Casper に触れながら、生まれつきと後天的とを分けた功績を讃える。しかしながら同時に、後者については放蕩者のことしか考えておらず、嗜好、流行、好みなどによってどれほど伝播するのか、即ち、社会的な影響力について十分に論じていないと批判する。“medicine”では、遺伝による精神病や神経症の混乱の観点から同性愛が考察されることが批判の対象となる。そうした論を提示する一人 Moreau に対しては、現代の同性愛については病気の観点から、ギリシャについては習慣の観点から捉えているという整合性の欠如が問題にされる。そして情熱自体は変わらない、倫理的、法的な見方が変わったただけだと述べて、民衆の意見に左右される分析を批判する。ここからも *Greek Ethics* では見られなかったギリシャ的愛の普遍性に焦点が置かれていることが分かる。*Greek Ethics* では、少年愛としての哲学的、教育的な愛の形を歴史的に考察することに終始していた。それは制度としてある種の特異なものを見なされていた。それとは異なり、*Modern Ethics* では生まれながらという理念を前提として本質主義的に欲望が捉えられるため、両者の主張には隔たりが生じる。Symonds は、もし遺伝による神経症や自慰が原因であるとすれば、ギリシャ人もそうであったのかと疑問を呈する。制度としてのギリシャ的愛の特異性を棚上げにして、その発展の歴史と欲望の普遍性を融合させるのだ。こうした論理は、病理モデルの不備を論破する武器とはなるものの、*Greek Ethics* との一貫性を損なうものと言わざるを得ないだろう。

“historical, anthropological”では、匿名の作者による文献として *Greek Ethics* に言及し、必ず参照すべきと述べる。実際 10 部の私家版でしかなかったのであるからこれはほとんど不可能なはずであるが、自分の議論に対する自負とともに、*Modern Ethics* と *Greek Ethics* との深い関わりの認識を窺うことができる。この節では *Greek Ethics* でも触れられている

Burton の議論も取り上げられる。*Greek Ethics* を送り、出版を勧められた仲であったが、Symonds は特定の地理や気候に限定することの欠点を指摘するのを厭わない。地域による同性愛の発生は法的な抑止という社会的な要因によるのだ。彼はここまでの論を纏めて次のように論じる。

After perusing what physicians, historians, and anthropologist have to say about sexual inversion, there is good reason for us to feel uneasy as to the present condition of our laws. And yet it might be argued that anomalous desires are not always maladies, not always congenital, not always psychological passions. In some cases they must surely be vices deliberately adopted out of lustfulness, wanton curiosity, and seeking after sensual refinements. The difficult question still remains then—how to repress vice, without acting unjustly toward the naturally abnormal, the unfortunate, and the irresponsible. (175)

このように“not always”という語を使って全体化を避けながら、Symonds は同性愛的欲望の特徴を記述する。その一方で、生まれつきとそうでないものとの差異は明確にし、後者と快楽を結びつけながら、前者の自然性を強調する。*Greek Ethics* では、高貴なものと同様なものとの区分は、生まれつきかどうかとは無関係であった。それを切り分けるのは、社会的な制度であった。それとは異なり *Modern Ethics* では、生まれつきかどうかが自然の観点から重要な分水嶺となる。彼は世間で考えられている悪徳としてのソドミーを認めつつ、それとの差異化によって健全な同性愛者を指定する。そうすることで、生まれつきの同性愛者に対する社会の不当な扱いを問題化し、法改正の必要性を唱えるのだ。

“polemical”では、自らの主張を散りばめながら Ulrichs の議論が共感を持って論じられる。Symonds は手紙をやり取りし、イタリアの家を訪問するほど彼を尊敬していた。残念ながら Ulrichs にはパンフレット執筆時のような情熱を見出せなかったようであるが、Symonds にとって彼の理論は重要な指針となっていた。しかしながら、Symonds は彼にまったく問題

がないとは論じていない。例えば、後天的なものの頻度や流行や墮落の力を無視しているし、オウィディウスなどの扱いが間違っていると述べる。自分の生理学的な理論に夢中になるあまり、これらの側面を見落としてしまっているというのが Symonds の指摘である。それでも、生まれながらの観点、本人には自然なのだから法律で犯罪として取り締まるのは不条理であるという論理は、法改正に重要な役割を果たすと Symonds は考えた。性的な欲望を抑圧することは、生涯に渡る禁欲を意味し相応しくないとして、身体的な欲望を肯定的に捉えることまでしている。それでも、Ulrichs が生まれつきと後天的なものを区別していないことを問題としながら、イギリスでは同じ犯罪として取り扱うことによって、後者に不公平がもたらされているとする議論は、既に指摘したように、前者をソドミーに結びつけて差異化する彼の特徴的な論理を明確に示している。実際、“the habit of sodomy are frequently acquired under conditions of exclusion from the company of persons of the other sex.” (186) と述べるように、生まれながらの同性愛者については“unmentionable indecency” (191) といった曖昧な語で行為を語るのとは異なり、後天的な場合はソドミーと明示する。彼は、男性間ではそうした行為が男女間よりも行われにくいという Ulrichs の主張に加え、前節では否定的に扱われていた Krafft-Ebing から、“the act commonly ascribed to them they generally abhor as much as normal men do” (191) という引用を行って身体的行為を遠ざける。ここでも Krafft-Ebing が、生まれつきのものと放蕩者とを区別していることに触れ、その重要性を繰り返す。こうした論理は Symonds が同性愛を理想化する議論と調和する。*Modern Ethics* においても、ドーリア人やテーバイの軍隊での英雄的情熱、高潔な生活を例に挙げ、最後の節では Whitman で締めくくるところから分かるように、男性同士の感情の理想化には、精神性への昇華が不可欠であった。生まれつきとそうでないものとの区別の必要性を繰り返すのは、こうした論理に役立つからである。実際、生まれつきかどうかを本質的に区分することはできない。両者が分けられるという説明として、Symonds はバブ

リックスクールなどで一時的に行われても、後天的習慣は先天的な性質にとって代わられるというUlrichsの主張を挙げるが、これは結果から判断しているに過ぎない。確かにUlrichsをはじめとしてSymondsが批判、検討しながら是認する同性愛を生まれつきとする議論は、その自然性、変更不可能性から、法的処置への反論となり得る。しかしながら、環境によっても行為がなされるのであるならば、自然と環境に対する恣意的な解釈なしで両者を分けることは理論的にできない。しかしながら、Symondsはこうした不可能性には目を向けない。というのも、彼にとって重要なのは男性間の情熱を理想化することにあるからだ。これは、ソドミーや墮落を後天的なものとは結びつけることによって可能となる。情熱から完全には身体性や感覚性を排除せずに、法律上、また社会の概念上、ソドミーとして焦点化される身体行為は避ける。こうした操作によって、差異化された生まれつきの欲望は、健全なものとして解釈される。*Greek Ethics*では制度に向けられていた焦点が、*Modern Ethics*では普遍性に向かう。こうした相反する視座を融合させるためにSymondsが用いる概念は自然である。ギリシャ人にとって同性愛は生まれつきの感情であったと彼は論じない。それでも社会の制度がそれを支えるために、彼らにとっては自然であったとSymondsは認識する。*Modern Ethics*では、さまざまな主張を批判しながらも、生まれつきとしての自然な同性愛を強調する。このような論理によって、性科学に裏付けられた新しい同性愛の概念と自然と調和するギリシャ精神とを重ね合わせるのだ。

最後の節では理想化された同性愛が議論の対象となるが、そこで中心となるのがWhitmanである。*Greek Poets*の注釈でギリシャ的と記述しているように、Symondsにとって彼の詩が伝えるメッセージは、ギリシャの概念と一致する。⁸そのため、この節ではギリシャへの言及が多くなされる。但しWhitmanは直接的に同性愛を扱ってはいないし、まったく関係がないと指摘している点は重要である。SymondsにとってWhitmanが同性愛の意図を持っているのかどうかは長年の疑問であった。そして*Modern Ethics*

でも言及されている通り、実際に手紙で真意を問いただすと、完全に否定的な返答を得るに至った。Symondsは、彼が性的倒錯について敵意を抱いているとさえ説明する。しかしながら、この否定が自身の解釈を揺るがすことはなかった。むしろ、そのような意識がない中で書かれているがゆえに、より理想化されたものとなっているとして、Whatmanが唱導する友情を賛えるのだ。それは完全にギリシャの愛と結びつく。

Personally, it is undeniable that Whitman possesses a specially keen sense of the fine restraint and continence, the cleanliness and chastity, that are inseparable from the perfectly virile and physically complete nature of healthy manhood. Still we may predicate the same ground-qualities in the early Dorians, those martial founders of the institution of Greek Love. (196)

節制、男らしさ、健全性。ここにはSymondsにとって重要な要素が凝縮されている。これらは彼が高く評価するドーリア人の軍隊的な男らしさと一致する。Whitmanの“the gospel of comradeship”(197)はさらに民主主義へと繋がり、卑俗で物質的なものの精神化にも寄与する。性科学に対する客観的な分析と批判であった*Modern Ethics*は、明らかに熱を帯びたWhitmanへの称賛に変わり、未来への希望の言葉で溢れる。ここではもはや生まれつきかどうかさえも問題とされず、強い絆へと一般化される。精神的な雰囲気や健全な感情の環境が与えられれば、“outcast instincts”(201)は回復され得るのだ。

Symondsは“The Dantesque and Platonic Ideals of Love”において、男性間の欲望と中世の騎士道の類似を論じているが、騎士道は身体性を排除した理想的な愛を語るのに最適な語であった。それは“an effeminate depravity”や“a sensual vice”(66)とは相容れない。そうした要素をWhitmanの詩に見出し、“new chivalry”として社会に浸透させることは、ソドミー法の改正だけではなく社会変革の可能性を秘めていた。⁹それはギリシャの自然と調和した健全な社会でもある。しかしながら、Symondsはそれを実現することがほとんど不可能であることを強く認識してい

た。そのため、希望に満ちた言葉は、推量や修辭疑問を伴わざるを得ない。全体の議論を纏め上げる言葉にさえ“perhaps”という語が添えられている。また“epilogue”でも、性的倒錯は法律の話題ではなく、医者、道徳家、教育家、社会の意見に委ねられるべき問題であること述べるに留まる。性科学から生まれつきのものとしての同性愛の概念を受け入れつつ、Symondsはそれを病理ではなく健全性に結びつける。そこではギリシャ社会とWhitmanが理想として作用した。しかしながら、法的改正を目論みながらも、当時の男性性の規範を重視し、身体性と罪の意識を内面化した彼には限界があった。Modern Ethicsが最終的に辿り着いたのは、理想としての控えめな提言だったのだ。

*

男性間の情熱への言及はあるものの、それ自体を中心に扱うものではないために、Greek Poetsは世間に向けて出版された。そしてギリシャ的愛を含んだ倫理的な疑いを込めた批判にも晒されたものの、そうした見方は限定的で称賛されもした。他方でGreek EthicsとModern Ethicsは、同性愛自体が主題であるがゆえに、Symondsは私家版としてしか出版しなかった。それでも友人や知人に回覧し、意見を聞いたという点では、まったく閉ざされたものではなかった。これらとは異なり、生前、誰の目にも触れることを許さなかったのがMemoirsである。彼がこれを書き始めたのは1889年からと考えられるが、死後でさえその行く末に大きな懸念を抱いていた。¹⁰それと同時に、自分の特異な立場の記述は後世の役に立つと自負していた。その点では、内省的な自己分析でありつつ、同じ立場の人々へのメッセージを通して社会改革に寄与するものと考えていたと言える。それは、将来の読者にとってSymonds自身が必要と考える情報を取捨選択した語りである。したがって、内容もさることながら、Memoirsについては物語行為に注目する必要がある。

そのような観点から見ると、自分の欲望を“wolf”と名付けていることは重要な糸口となる。それは“that undefined craving coloured with a vague but poignant hankering after males”(366)として、彼にとっ

ては抑えるべき衝動であった。¹¹彼は情熱の原因を探りながら、それをどのように位置づけるのかを模索した。大陸における議論に触れる前から、彼は自分の欲望を生まれつきのものと考えていた。それは随所で“instinct”という語を用いていることから分かる。同時に、彼はそれを“malady”や“sin”という語でも形容する。したがってGreek EthicsやModern Ethicsでは健全性を主張するものの、彼は同性愛への否定的な概念を内面化していたことが窺える。少年愛を父に告げることでC. J. Vaughanをハロー校の校長職から追いやった出来事は、そうした認識がもたらした顕著な例であろう。このことは当時の同性愛嫌悪のイデオロギーがいかに強力であったのかを物語っている。

そのような罪の意識から抜け出す契機となったものとして、彼は幾つかのエピファニー的出来事を記録している。その一つは、第六学年でのプラトンのPhaedrusとSymposiumとの出会いである。彼は次のように述べる。

I had touched solid ground. I had obtained the sanction of the love which had been ruling me from childhood.... I now become aware that the Greek race—the actual historical Greeks of antiquity—treated this love seriously, invested it with moral charm, endowed it with sublimity. For the first time I saw the possibility of resolving in a practical harmony the discords of my inborn instincts. I perceived that masculine love had its virtue as well as its vice.... (152)

Symondsは、ギリシャの愛を知ることによって、歴史的な現実として同性愛を捉える視座を持つ。これによって、彼が見聞きしてきた悪徳としての同性愛とは切り離された高貴な愛が認識される。Symondsは、この区分に基づき自然な本能との調和として自らの欲望を肯定するのだ。ここで彼に特徴的であるのは、ギリシャの愛から同性愛の普遍性を主張するのではなく、特異な歴史とすることで、悪徳的な同性愛とは別の理想化を行うことにある。それによって、中流的な男性性規範を維持しながら、快樂的ではない同性愛を措定できるのだ。

1865年に初めて目にすることとなった Whitman の詩は、もう一つのエピファニーをもたらすものであった。彼にとって *Leaves of Grass* は聖書と同等のものとなり、*Greek Ethics* 執筆を決意させたと述べている。“Calamus”に触れることで、欲望は“manlier, more defined, more direct, more daring” (368) になったと言うように、Whitman も男性性規範と理想との均衡に重要な役割を果たしたのだ。Symonds が本人に問いただしているように、Whitman の詩と同性愛の関係は、当時の人々の目には必ずしも明白ではなかった。¹² しかしながら Symonds にとっては、本人の否定さえも意味をなさなかった。そのように自らが解釈できれば良かったのだ。ここで注目すべきは、プラトンと Whitman が自己形成に与えた影響について語る彼自身の姿を後世に伝えようとしている点である。それは単なる自己分析ではなく、自己の欲望の肯定と、その共有という遂行的行為なのだ。

プラトンと Whitman から得られた新しい同性愛の認識は、歴史的記述と詩を通してのものであった。その点で“wolf”の問題は、依然として強く残されていたと言える。それをより現実的に捉えることを可能にしたのは、売春宿での兵士との経験であった。その時でさえ、Symonds は“any brutal impulse” (254) に身を任せることなく、裸体との近接を楽しんだと記述している。彼にとって、ソドミーは否が応でも下劣な野蛮性や悪徳と結びつく。それとは区別すべき理想的な愛こそが、男性性の規範を遵守しつつ、情熱を肯定することができるものであった。Symonds はこの邂逅に、感覚的、身体的欲望を満たしながら、理想と現実を結びつける可能性を見出す。

This experience exercised a powerful effect upon my life. I learned from—or I deluded myself into thinking I had learned—that the physical appetite of one male for another may be made the foundation of a solid friendship, when the man drawn by passion exhibits a proper respect for the man who draws. I also seemed to perceive that, within the sphere of the male brothel, even in that lawless Godless place, permanent human relations—affections, reciprocal toleration, decencies

of conduct, asking and yielding, concession and abstention—find their natural sphere. (490)

思い込みだろうかかと自問自答しているように、彼は断定的に述べてはいない。しかしながら、こうした控えめな態度こそが、彼の書き物に窺うことができる特徴である。Symonds は、理想と現実、精神と身体、倫理と悪徳、公表と秘匿とを揺れ動きながら、自らの欲望を位置づけようと模索する。現代風と言うならば、それは社会によって否定された愛を誇りに変えるカミングアウトへの不安や戸惑いと重なり合う。

The Picture of Dorian Gray の登場人物に例えるならば、Symonds は、同性愛的欲望を持ちながらも倫理的な規範に縛られるバジルを思い起こさせる。バジルがドリアンにより殺害され、忘れ去られる存在であったように、Symonds もある種、同様の運命を辿ってきた。しかしながら、これは彼の思想がもはや過去の遺物でしかないということの意味しない。確かに彼は *Greek Ethics* にしても、*Modern Ethics* にしても広く世間に公表しなかった。また *Memoirs* が出版されるまでは一世紀近くを要した。しかし“we have the right to exist after the fashion in which nature made us.” (194) という *Modern Ethics* における言葉は、明らかに現代に通じる。Symonds は、歴史的かつ本質主義的な観点から、男性間の欲望を理想へと押し進めようとした。それは一貫性を欠きながらも、ギリシャと当時の性科学を繋ぎながら、来るべき未来へ向けたものであった。しかしながら、それから百年以上経た現代でも同性愛嫌悪のイデオロギーは依然として強力に機能している。社会による否定に抗い、同性愛の肯定を試みる彼の姿は、恥や悪として内面化することを迫る今日の社会に抵抗する多くの同性愛者たちの姿と大きな違いはない。彼の歴史的考察は、セクシュアリティと社会制度との関係性に目を向ける必要性を教えてくれる。また性科学への批判は、科学の恣意的な解釈行為を気付かせる。同性愛の位置づけを懸命に模索した彼の議論は、現代にも有用な視点を与えてくれるのだ。

注

1. Holland, 656.
2. “Doric chivalry”における男性間の絆については、これ以前にテオグニス詩についての議論でも記述されている。
3. *The Examiner* は、第二シリーズ出版時においても書評を行っており、第一シリーズよりも改善しているとおおむね称賛している。そして最終章については多くの点から不快に思われざるを得ないと指摘しながらも、“one of the manliest and soberest utterances that has been lately made, and will find more and more adherents as the light progresses and triumphs” (713) と述べている。
4. 本論における *Greek Ethics* からの引用は Brady 編集の初版版による。但しギリシャ語については Brady の注釈の英訳に変更して記す。
5. *Sexual Inversion* に含まれた *Greek Ethics* では女性の同性愛についての記述があるが、生まれながらの女性同性愛者を認めながらも、社会制度に支えられなかったため墮落に向かうしかなかったと論じられる。このように *Greek Ethics* では徹頭徹尾、社会の扱い次第で性質が変わるという立場が取られている。
6. Symonds は次のように記している。“I have received a great abundance of interesting & valuable communications in consequence of sending out a few copies of that ‘Problem in Modern Ethics.’ People have handed it about. I am quite surprised to see how frankly ardently & sympathetically a large number of highly respectable persons feel toward a subject which in society they would only mention as unmentionable. The result of this correspondence is that I sorely need to revise, enlarge, & make a new edition of my essay; & I am almost minded to print it in a PUBLISHED vol: together with my older essay on Greek Morals & some supplementary papers” (*Letters III*, 579).
7. 本論における *Modern Ethics* からの引用は Brady 編集の初版版による。
8. 出版時には削除されたものの、*Greek Ethics* にも Whitman への言及がある。その他 Whitman に関しては、“Democratic Art: With Special Reference to Walt Whitman”を執筆しているが、タイトル通り民主主義の芸術が主題であり性的な要素についての言及はない。他方で、逝去と同日に出版された *Walt Whitman: A Study* では、“a new chivalry”と“Calamus”との関係も論じられている。全体として同性愛を中心に論じてはいないものの、彼の論考としてはかなり大胆なもの

である。

9. Charles Kains-Jackson が自ら編集する雑誌 *The Artist* に掲載したエッセイ“The New Chivalry”が示唆するように、同性愛を騎士道的な理想と重ねて擁護することは当時の同性愛者にとっては重要な手段の一つであった。こうした状況については Reade を参照。
10. Symonds は Horatio Brown への手紙で次のように述べている。“I want to save it [the autobiography] from destruction after my death, and yet to reserve its publication for a period when it will not be injurious to my family. I do not just now know how to meet the difficulty... If I could do so, I should like to except it as a thing apart, together with other documents from my general literary bequest; so as to make no friend, or person, responsible for the matter, to which I attach a particular value apart from life’s relations” (*Letters III*, 642-43).
11. 本論における *Memoirs* からの引用は、Regis 編の決定版による。
12. Symonds が助言を行った William Sloane Kennedy は、*Reminiscences of Walt Whitman* において Symonds の解釈に疑問を呈している。また Bristow は、Ellis でさえ同性愛的欲望に気づいていなかったように思える旨を指摘している。

参考文献

- Amigoni, David, and Amber K. Regis. “Introduction: (Re) Reading John Addington Symonds (1840-93).” *English Studies* 94 (2013): 131-36.
- Babington, Percy L. *Bibliography of the Writings of John Addington Symonds*. New York: Burt Franklin, 1968.
- Brady, Sean. *John Addington Symonds and Homosexuality: A Critical Edition of Sources*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2012.
- . *Masculinity and Male Homosexuality in Britain, 1861-1913*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2005.
- Bristow, Joseph. *Effeminate England: Homoerotic Writing after 1885*. New York: Columbia UP, 1995.
- . “Symonds’s History, Ellis’s Heredity: Sexual Inversion.” *Sexology in Culture: Labelling Bodies and Desires*. Ed. Lucy Bland and Laura Doan. Cambridge: Polity Press, 1998. 79-99.
- Brown, Horatio. *John Addington Symonds: A Biography Compiled from His Papers and Correspondence*. 2 vols. London:

- John C. Nimmo, 1895.
- Buckton, Oliver S. *Secret Selves: Confession and Same-Sex Desire in Victorian Autobiography*. Chapel Hill and London: The University of North Carolina Press, 1998.
- “Death of Mr. John Addington Symonds.” *Times* 20 Apr. 1893: 10.
- Dellamora, Richard. *Masculine Desire: The Sexual Politics of Victorian Aestheticism*. Chapel Hill and London: University of North Carolina Press, 1990.
- Dowling, Linda. *Hellenism and Homosexuality in Victorian Oxford*. Ithaca and London: Cornell UP.
- E. G. W. “Mr. Symonds’ New Volume.” *The Examiner* 24 June 1876: 712-13.
- Ellis, Havelock, and John Addington Symonds. *Sexual Inversion*. London: Wilson and Macmillan, 1897.
- Grosskurth, Phyllis. *John Addington Symonds: A Biography*. London: Longmans, 1964.
- Heidt, Sarah J. “‘Let JAS Words Stand’: Publishing John Addington Symonds’s Desires.” *Victorian Studies* 46 (2003): 7-31.
- Holland, Merlin, and Rupert Hart-Davis, eds. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. New York: Henry Hold and Company, 2000.
- Kennedy, William Sloane. *Reminiscences of Walt Whitman with Extracts from His Letters and Remarks on His Writings*. London: Alexander Gardner, 1896.
- Nisbet, Gideon. *Greek Epigram in Reception: J. A. Symonds, Oscar Wilde, and the Invention of Desire, 1805–1929*. Oxford: Oxford UP, 2013.
- . “How Wilde Read John Addington Symonds’s *Studies of the Greek Poets*.” *Oscar Wilde and Classical Antiquity*. Ed. Kathleen Riley et al. Oxford: Oxford UP, 2018. 37–55.
- Reade, Brian. Introduction. *Sexual Heretics: Male Homosexuality in English Literature from 1850 to 1900*. New York: Coward-McCann, Inc., 1970. 1–56.
- Rutherford, Emily. “Impossible Love and Victorian Values: J. A. Symonds and the Intellectual History of Homosexuality.” *Journal of the History of Ideas* 75 (2014): 605–27.
- Schueller, Herbert M. and Robert L. Peters, eds. *The Letters of John Addington Symonds*. 3 vols. Detroit: Wayne State UP, 1967–69.
- Simcox, G. A. “Studies of the Greek Poets.” *The Academy* 15 July 1873: 261–62.
- Smith, Timothy d’Arch. *Love in Earnest: Some Notes on the Lives and Writings of English ‘Uranian’ Poets from 1889 to 1930*. London: Routledge & Kegan Paul, 1970.
- “Studies of the Greek Poets.” *The British Quarterly Review* Oct. 1873: 593–95.
- “Studies of the Greek Poets.” *The Illustrated Review* 28 August 1873: 198–200.
- Symonds, John Addington. “The Dantesque and Platonic Ideals of Love.” *In The Key of Blue and Other Prose Essays*. London: Elkin Mathews, 1893. 55–86.
- . “Democratic Art: With Special Reference to Walt Whitman.” *Essays Speculative and Suggestive*. Vol. 2. London: Chapman and Hall, 1890. 30–77.
- . *The Memoirs of John Addington Symonds*. Ed. Phyllis Grosskurth. New York: Random House, 1984.
- . *The Memoirs of John Addington Symonds: A Critical Edition*. Ed. Amber K. Regis. London: Palgrave Macmillan, 2016.
- . *A Problem in Greek Ethics*. Brady 39–121.
- . *A Problem in Modern Ethics*. Brady 123–208.
- . *Studies of the Greek Poets*. London: Smith, Elder, & Co., 1873.
- . *Studies of the Greek Poets: First Series*. 2nd ed. London: Smith, Elder, & Co., 1877.
- . *Studies of the Greek Poets: Second Series*. 2nd ed. London: Smith, Elder, & Co., 1879.
- . *Walt Whitman: A Study*. London: John C. Nimmo, 1893.
- “Symonds’s Greek Poets—Second Series.” *The Saturday Review* 19 August 1876: 237–39.
- “Symonds’s Studies of the Greek Poets.” *The Saturday Review* 20 Sept. 1873: 379–81.
- Tyrwhitt, R John. “The Greek Spirit in Modern Literature.” *The Contemporary Review* Mar. 1877: 552–66.
- W. M. “Mr Symonds on the Greek Poets.” *The Examiner* 18 Oct. 1873: 1049–50.
- Weeks, Jeffrey. *Coming Out: Homosexual Politics in Britain from the Nineteenth Century to the Present*. Rev. ed. London and New York: Quartet Books, 1990.
- Woods, Gregory. *A History of Gay Literature: The Male Tradition*. New Haven and London: Yale University Press, 1998.